本篇

宇宙の體系

宇宙は驚嘆に堪へざるもの、深奥の本質は潛心精慮するも到達すること能はず、かゝる不思議の實體に對し畏敬尊崇あらざる可からず。

宇宙は何ぞや、其構造は如何、其本質は如何、

世界は其本質及び存在上、絶對的に獨立せる原子より成立せりや。然らず。一切の生物は相互に影響し、各原子は自餘の原子によりて規定せらるゝ普遍的相關を假定せしむ。普遍的相關は奇異の事實にあらずや。

自然律は原子を驅りて相互に關係せしむ。自然律は原子の實際の運動を表彰せるものにして外部より規定するものに非ず。獨立せる原子が普遍的に相關せるは驚嘆の至りならずや。一切の事物原子により惹起せらるるならば、宇宙體系、有機體、思想感情、實在は如何に奇ならずや。

原子論者、竟に原子の秩序の變化のみにては思想感情の發生を說明するに窮し、原子は、廣袤と運

動とを有するのみにあらで、統一的原理及精神的原理をも包含するを自白す。

一貫の理性

天地自然の現象、大にしては、天地山川、自然の法則によりて整齊し、小にしては、萬物雜然として、社會の現象、自然の狀態、紛々擾々たる萬物は、眞實平等の理性の上に水と波との關係の如く、波は變轉いかに無窮なるも水の性を失はず。萬法を分析し概括する時は、其の中に遍在する一貫の理脈あり。此の一貫の理系卽ち眞如の理、平等性なり。

絕對理性

宇宙の本質內容は絕對理性態、卽ち一切智心、之を如來平等性智と名づく。宇宙實質は全體觀念態なると共に萬有の內面は理性態なり。

自然現象、大にしては天體星宿の運行より、小にしては地上の動植物に至るまで、其の秩序の整然たるを見れば、之を統攝する理性なかるべからず。亦一切小大となく萬物の別々性と、根底の理性とは、水と波との關係の如く、波の變轉いかに無窮なるも、水性を失はざる如く、普徧に一貫せる理性あるを認むべし。

萬物はこの一貫理性に繫りて不可割の關係を有す。若し萬物に統一せる理系の有るなくんば、吾人は如何にして自己以外の萬物を理解することを得ん。普遍なる理性によりて特殊の萬物を推論することを得るは、一切に一貫せる眞理、卽ち性智の光なり。また換言せば總該萬有心の內容理性なり。

現象と實體

表面に有限個々の世界は悉く絕對無限の理性なることは、已に進化せる精神には理性的に認識することを得べし。自ら深く觀じ靜慮默考すれば、無限の星宿及び宇宙の一切は、悉く自己精神と一致せる、絕對理性の中にして、之を離れたる一切境界なきことを認識すべし。

カントは謂らく、全部としての世界は觀念の對象にして認識の對象に非ずと。

感覺界に對する認識は之れ謂ゆる識の分にして、絶對の精神態に對する認識を智慧態とす。

フエヒネルが、物の眞體は環の如し。外より觀れば總ての部分が中高にして內より觀れば總ての部分が中低なりと、觀る所の內外は全く反對の感をなさしむ。現象は外觀にして他觀なり、實體は自觀なり、自觀は智なり。現象は感覺にして實體に同じからず。影と形との如し、影は光線と共に消滅す。形はしからず。現象は感覺と共に消滅す。

心靈の自觀は智にして心靈の現象は物界なり。之を識界とも名づく。科學は識の境界にして高尙なる哲學は智の分界なり。

識の方面より卽ち現象より研究するは科學とし、內觀の心體を研究するは哲學なり。是智の分際なり。

權敎にては現象と實體卽ち識界と智界とを別つと雖も實は一元の唯心なり。圓敎にては識の現象界と靈知の觀念界とは一體の兩方面なりとす。

天然現象界に相應せる識界の方面は、實をもて論ずれば、絶對無限の內容より、有限の方面に現象

界と觀るものにして、有限の識が表面と觀る現象界は實は實體の裏面なり。外に眼を放つと思ふは內に向つて眼を向くるなり。

個人の寫象によつて現象界の有限を觀る。

一切知と一切能

法身、如來藏、卽ち一大精神に一切知一切能の權能あり。

一切知と一切能によりて萬有を建設し、一切知は萬有に內存し、天則秩序として、時間空間の形式に、因緣律に規定し、大にしては天體の星宿の成生及び運動に皆秩序の整然たるありて、地上の萬物起伏生滅に至る。

自然界は客觀々念が意力に實現せらるゝに、一切知と一切能とによりて世界を建設す。一切知は一切作なり。いかにとなれば法身の一切知は一切萬有に內存して、萬有造化の觀念が一切を造作し、之を造作する絕對意志の爲に司令者として秩序を整束す。一切知は天則秩序の理性として萬有に含蓄し萬物を統一し、宇宙全體が全一の身體にして、萬有卽ち自己なれば、法身一切知は萬有の中に在つて萬有を造化す。

萬有は表面には個々孤立的に觀ゆるも、根底に於て統一的理性あり。故に統一的系統ありて萬有は

不可離の關係を有す。萬有が統一的理性を根底とするが故に宇宙全體の力に依らざれば萬物は生起すること能はず。總體としての宇宙は空間に無限に時間に無限、永久自動自活。共に自己にありて、天則的に常恒に建設的衝合行はる。永久自動自活して無窮なり。

無明何に依りて起る

宇宙全體が物心不二の絶對心靈態である。この全一の心に意志と寫象との二屬性を有す（人の精神に知覺と運動とある如く）如來藏心の絶對より相待の自然界を現出するに、二屬性あり、一切能と一切知となり。一切能に一切物質を運動生活々動せしむる用あり。此二性は宇宙全體に亙りて徧からざるなし。萬物を生活々動せしむるは一切能にて、萬物を成立するに秩序を整へ條理をなすは一切知なり。

視よ大にして天體の星宿循環運動より小にして地上の有機物動植物の生理、悉く理論的に條理を齊えて、有機性を備へ生活々動す。是悉く其本源は如來藏心の一切知能とが徧滿すればなり。

如來藏性絶對より相待の世界に發展せんに、秩序をなす一切知は離れざるも、先づ一切能の力にて絶對より相待に向て發展せられたり。

無明何に依て起る。

古來無明と本體との區別を確乎として認めたる說なきがごとし。

今曰く、如來藏性は宇宙本體物心無碍の心態にて、其屬性一切能、卽ち一大意力が、相待自然界に向て發展產出する能力なり。動じて生滅と爲す力なり。本來意力は不識的にして、運動せしむる性なり。力なるものは運動を掌る故に、然れども絶對には兩性離れざるが故に。一切知伴はざるなし。是萬物に條理の存する所以なり。

能展なる藏性は無明なる盲動にあらず。若し能展なる藏性にして一切知有せざらんか所展なる萬物に秩序も條理の性も存する無けん。然るに萬有悉く秩序あるは是藏性が盲動にあらざる證なり。

所展たる自然界の萬物は卽ち藏性より產出されたる子なり。子は親の如く知はあるも潛伏態なり。子の方に、一切知の分賦たる知がまだ伏能にて、一切能の分たる不識意志の運動のみ活動するを無

明と云ひ。無明とは衆生が有する生理衝動のことなり。

信論に藏性を動かす無明の風と云ふ。絶對の藏性に何れよりか無明と云ふ風が發すべきか。其發動の處を發見すること能はずして、古來妄霧の裡に彼は形を隱せり。

今曰く、其無明は他より發したる風にあらず、絶對心の屬性たる一切能力卽ち意力なり。不識運動の性なり。此能力が萬有を發展し運動し活動せしむる原動と成るなり。絶對心の屬性である人の運動活動意志と同じ物なり。

人の知覺も運動も其性は異にすれども同一の精神の性である。精神も意識的のみにあらず不識的精神あり。

今宇宙全一の徧動力、一切能が、不識的に常恒に運動し、世界と發展し、世界より三轉して生物界と轉じて、生活々動す。悉く絶對意志の分運動に外ならず。

無明

神性より三展したる衆生性は、神が萬物を現象界に發展するは一切能力エネルギなり。神には本より無明なく、一切知一切能とを以て、萬物自存として、造化す。所展の子は、一切知の分たる知性は伏藏して、生活を爲すに一切能の分が先づ發動す。されば原始の生物また胎兒も不識意志の働ありて生存す。

人もまた生れて幼稚の時代は不識的に生活運動す。內的生活の精神は漸次に後に發達す。感覺にても觸覺等が先に働き、何にしても肉の生活の便利と生理の則に則りて發達するごとし。感覺知覺感情理性等他の動物と共通性なるは先に發達し、人間的の要素なる精神は漸次に後に發達す。

物理的の身體生活は手段にして、一切知の分たる靈知開發して神の本性に向つて進むは目的なり。世界及衆生の發生せる時は、知は伏能にて、能力は先づ發動し、能に知は隨順す。されば一切の生物が未だ靈性開發せざるほどは、只肉の生活の爲に全力を盡くし、知は只肉の生活を計るに過ぎず。故に衆生的の知にして靈智にあらず。

不識意志の生活より、また人類の肉の生活意志は、神の一切能にして是を生理衝動と云ふ。一切の生物が自己を保存せんとの勢力なり。卽ち活きんとの氣、是が人類の進化、肉の我、生理の我、自己

の保存の養分もまた生殖の作用も悉く生理の本能として存す。

これ大にしては一切能一展して天地陰陽の元氣となり、三展して生物の生理衝動として、大より小悉く一面より觀れば、宇宙一切の生物を生理的に生存せしむる能力の存在するを見る。是唯物論または元氣陰陽論との主義とする處、是また手段として最も必要なり。故に此方面に重きを爲す論者は生殖作用を神聖視し神の捉とし造化の妙用とす。是また理なきに非ず。然れども若し神の目的たる靈性開發し永遠光明に歸する道を未だ意識せざるはいまだ階段にして宇宙及び自己靈性の伏在を認めざるは遺憾なり。

亦一方に神の眞性に歸復するを重視して手段の生理を蔑視し、生殖は罪惡の根本なり愛欲は輪回の源、此を根本に脱却せざれば生死を脱する能はずてふ論者もまた圓滿なる說といふべからず。

然れども手段を神聖として高等に進んが爲にすると、また、目的を輕視せば衆生は生々輪回を脱する能はずてふ方よりの方便として說くとせば可ならん。

無明及び煩惱とは未だ知性開顯せざる生理衝動に名づけたるなり。

遠心力と求心力

神の一切能によりて二展三展したる生物は自己の肉我を中心として自己愛、我執我愛執藏等の自我を愛し、生物自然の常規は自己を中心として、自己の生活に利ならば之を求め、不利の敵には抵抗しまた恐怖し、すべて利己愛我主義なるはすべての生物の通性なり。其自我なるものは生理上の我なり。肉の生活を目的として自然世界の上に自己の利を獲んとす。

本源の絶對無我の眞理に合一せん爲めの高等なる靈性は未顯なれば、無明卽ち生理衝動主義は飽までこの肉我を保存せんとの主義目的なれば、自ら大我に投歸せんとの意志無し。

如來に、常恒に一方には世界に發展する力と、また一面には攝取の光明ありて卽ち求心力を法界に普及して、解脫し度生して本覺の光明に攝取せんとす。

肉我中心の生物は此に對して反抗の意味を以て盲目的に小我の目的に向て盲動す。此生理衝動は、手段としては、或程度までは遠心力を以て自我發達を目的として進行せざるべからず。生理生活の自

我にして完全に發達せざれば靈的生活の方面を開發せんにも圓滿なる能はざればなり。自我中心の絶對に對する自然の遠心力はまた性の然らしむるならん。

微少なる生物より進化して高等なる人類に進みしも皆この自我愛の遠心力によりてなり。外的生活が完全に達せるときは、遠心力を以て求心力に抵抗するは、處女が或年齢の時期に達する迄は雄性を拒むと云ふごとし。

生理我が完全に發達して精神が或程度に進化する時は、自己の內的靈性が機會だに捕捉すれば自發せんとの靈的衝動神的憧憬として灰かに面目を現さんとす。

之は內に神の分子たる靈性豫め具備して、其手段階級としての身體組織の頭腦も圓滿に成熟し、外に求心力の性が充滿し、之れが世界に發現しては佛陀の福音宗教として世に流行す。此世に行はるゝ宗教、卽ち如來求心の具體的現象なり。有佛無佛、性相常住にて假令世に佛教が言語文字の間に行はれざるも眞理は本來常住なり。

宇宙に其靈的光明の力が充滿することは宗教的三昧の修行爲すものの經驗する處、求心力とは大我なる如來が衆生の靈性を開發して神の自己の本に復して眞理に稱ふ靈の生活をなさしめんとの理性な

り。神の求心に應じて自己を投歸すと云ふも敢へて此肉體を亡して靈性に入との謂に非ず。只須らく自己の伏藏靈性を開發し、靈の光によりて自己を發悟し、自己は如來の靈によりての我なるを認め、此靈我は絶對にして此彼なく永恒本然にて生滅なきを悟り、而して此靈の光明發せんか、此光明によりて、一切能よりの分たる自己の生理生活を指導し訓練し靈化して神の中に生活するが之れ此神の求心に應じたる生活なり。今は理想に於て神の光明中の靈我となる。然れども此形はまた世界の相待規定の約束を悉く脱すること能はず。即ち此形は養分を攝せざれば生活する能はず、此の肉の命盡る時は實際の靈界に歸入す。正しく求心に全然應じたるなり、即ち神と一體に歸するなり。

無明と一切能

如來一大能力が相待世界の方面に發展分現して、一大元氣として、力ある物質分子として、自然界に常恒造化の大用をなす。

自然界と現れては、相待的因果秩序あり條理ありて、常に建設事業を施すは是一切知に伴ふ一切能

の力なり。

發展せられたる被造者世界及び衆生らは、一切知の分賦は性能として、伏藏し、一切能力の分たる物理的生理的生活の方面が先づ顯動す。極大より分展して世界と現はれ、世界より發展分出して衆生と現はれ、生物界には最初原始極小の生物として分出す。

一切能の分現、衆生生理の衝動、卽ち煩惱なるものは、正當なる生活目的の爲には、本、世界の方面に於ては敢て障碍なるものにあらず。貪瞋痴等すべて生理の自然に具はれる正當なる性、必要なるものなり。

然れどももと生理衝動は、高等なる靈性を伏藏し、之を顯動態に發達し、この靈的知性の光明によりて生理衝氣を指導し訓練し靈化して、始めて本能を完全に開發々達して、天よりうけたる職分をつくすべきものとす。伏藏せる靈知性をば開發顯示し、生理の能力は靈化して、靈能として活動す。

此靈知の伏藏態を開顯せざるを（圓覺經に）理障とす。靈能靈化發揮せざるを事障とす。

卽ち絕對靈より、一切能の力にて發展分現せる衆生は、靈知開顯せざる時は、生理衝動が小我を中心とせる生理の活氣は、遠心力を以て、大靈の求心力に抵抗す。そは一には未だ生理的機能が靈能を

發顯する機未だ圓熟せざるを以てなり。例へば生殖機能熟せざる雌性が雄性を抗する理の如し。

生物は原始の極小より、內的生活の根底に伏藏せる靈性が顯動せんとする內的自發性と、大靈の求心力と、この因と緣との力が、自然に宇宙に存在せるを以て、世界生物の進化の原則となり、生物界は向上進化す。

楞嚴に、

世界、有爲の發現する緣起は、地、水、火、風、空、識、等の七大の本體たる、眞空妙有の如來藏性、清淨本然、周遍法界の本質が、一切處に充滿して方處なく、循業隨緣の發現なりとのその意は、循業の業は業力、卽ち宇宙全一心の屬性なり。一切能の力の遍動力を業となす。卽ち一切能の力が原動力となる。

又隨緣とは、絕對より相對の因緣の方面に現れて、世界全體の働きをなすこと。この働は相互の複雜なる關係を以て爲す。一として其中に因緣の關係なきはなし。故に發現と云ふ。

もと絕對の如來藏性なれども、業力より發現せられて、自然と相對の世界となる。相對と發現し來れば、地水火風等、各々自己の本性をもつて、相互の間に、力の起點より合離合散、相互に親和し競

爭し、遠心と求心との兩力の關係にて、種々の因緣よりして、世界と成立して、自己の性の圓滿に發達せんが爲の性能を具す。

根底に常恒遍動の一切能の力ありて、內面に具備する一切知よりうけたる性能が發現せるもの、進化して發達し相互に休止なく進行する勢力は、自然と遷流有爲の相と現はれ、世界相續もこの因緣による。

又世界は廣大なる設備を以て衆生を養成す。

本覺は絕對の靈體なれば明無明を超絕したる靈體、それを性覺妙明、本覺明妙と（楞嚴に）名けたり。本覺とは本來自爾の靈體は覺不覺を超絕したるも不覺に對して靈體と名づく。自然の圓覺なり。妙とは本體寂靜、不可思議にして妙靈、靈鑑不昧の故に妙明。

本體の性質は靈妙明照なれども、一切能力より、卽ち循業に、發展せらるれば、自然と絕對より相對となり、無限より有限と現じ、本體より現象となり、自然と能と所の相對と現はれみれば、本來は因緣因果も無きはずなるも、因と云ふ個體、遠心力を中心とする個體となりて、絕對をば自己の性とは背向する對比的に觀るやうになる。卽ち遠心力が世界の中心となりて發す。

此に三展あり。絶對の本性より相待の因緣律となり、因緣によりて世界成立し、衆生となる。世界及び衆生は悉く因緣と自然律を要することになる。

本來第一義は絶對の如來藏性なれども一展せられたる第二義の相對的は第一義を根底とし本體とし而も現象として、相對的には自然律となり、自然律は相對的に必ず因緣因果の約束なしには世界も衆生も成立すべきものに非ず。此因緣によりて世界衆生を現出す。

（註　楞嚴經の原文は略。）

六凡と四聖

一大法身、卽ち法身如來藏心、宇宙萬物を總合する故に總該萬有心とも云ふ。宇宙現象界はこの一大心の發現の一方面なり。

一切智と一切能とがありて、智によりて天則秩序を整へ、能力によりて萬物を生々活動させる。

實體の本質は永恒不變、如來の自境にて、現象界は不識精神である。生物は肉の眼は覺えて意識するけれども、まだ心靈は無明である。これを六凡と云ふ。已に覺醒して宇宙と冥合したのが聖にて四種あり。この六凡四聖を十界と申し、法身より顯象したるものである。

炎王光

絶對理性によつて統一せらるゝ世界萬類卽ち一切衆生は、阿彌陀の根底に出て佛性具有し、終局に歸趣すべき理性ありといへども、阿彌の理性を陰覆する處の素質あり。之を脫却するに非ざれば阿彌の本質に歸趣すること能はず。其惡素質を脫却斷破する處の阿彌の性能を炎王光と名づく。

炎焰をもてすべての穢物を焚燒するが如く、また焰王光もて大闇黑を照破する勢用に喩へたるなり。初めに衆生必然的に陰覆する素質を明し、後に如何して之を脫却すべきの理由を說明せん。

障礙物に三種あり一煩惱障、二業障、三苦障、之を惑業苦と云ふ。惑は煩惱。見思、無明等の惑。業は善惡不動等の有漏の業。苦とは分段變易生死の苦。

生死迷惑の理を論ずる時は、所謂本覺の理性が、不覺の故に、眞に迷ふて心動ずるが故に、一念忽然念起する故に、能見の心生じ、之に對する境界顯現す。境は自心より起ることを知らず、天則を實理とし、自己に於て主我を執し、我執の幸福主義より惑ふて、違順の境に對して貪と瞋とを生じ、爲

に善惡の業を造り、業に依て苦樂の報を受く。こゝに於て、六道業繫の苦を受く。

是を略して云はゞ、惑によりて業を造り、業によりて苦報を受くるなり。

然るにこの三障を脫却の時には、初に苦を感じ、苦の元因は惡業にして、惡業は惑の衝動なりと知り、而して之を脫却すべきの必要を感ずべし。

故に初めに苦障卽苦毒の感情、人の天然性は幸福を求むるも甚だ得がたく、意志は滿足を望むも、是また滿足は得がたし。何故に滿足を得がたきやとならば一は世界天則の性能は意志の希望に支吾をなすと、一には自己の機制の然らしむるによる。

三苦は、所謂、苦々、壞苦、行苦等。又生老病死、哀別離苦、五陰盛苦、求不得苦、怨憎會苦。要を云はゞ生死の苦なり。いかに幸運の人も其實幸福主義には意志の滿足を得べき理なく、先に渴望したる目的に到達しぬれば比較的に價値なく、希望は遠く渴望を陽炎に求むるが如くにて、畢竟して意志を足らしむるに非ず。能く觀じ來れば、人は天然の幸福目的の如くならず、誠に生くるの價値はなく、生活は鹿の陽炎を遠く渴望する如し。こゝに於て宗敎の必要を感ずべく、炎王光の妙用を仰ぐべし。

之は苦毒をすつる意志より、人生苦惱多しとの觀念を本となす。苦毒の感情は解脫の要なり。若し苦毒の感ずるなくば、解脫の必要を知る動機なけばなり。

惡業に關しても然り。惡とは、道德秩序卽ち無上菩提阿彌の意に背きたる邪智情操と行爲となり。吾人は前に絕對理性の個人にして佛性具すと述べたり。理性阿彌の本質の中に於て阿彌の目的無上道德に協力して活動せざるべからざる理性を有するにも拘らず、絕對中なる個人は、絕對に反對する情操と行爲とは斷然排除せざるべからざるを、却つて自ら保護する如き性質ある、之を惑といふ。

絕對無上道德の理性を顯はすと共に、之に抵抗するものを不道德卽ち罪惡とすればすべて之を脫却して、阿彌の理性に隨順して活動せざるべからず。之に障害するものは飽くまで排除せざるべからず。無限に進化發達すべき無上菩提の過程に障害物たる惡は、一處にては惡に非ずとも他處にては却て害となるあり。進化の階級にあつて曾ては菩提の大道に到るものも却て今日には害と成るものあり。所謂昔小乘佛敎時代に自調自度の聲聞主義は、大我の利他的救世的菩提主義の時には、たとへ疥癩野干たるも聲聞根性を發するなかれと云ふ如し。阿彌の目的にかなはざるものは悉く惡なり。不道德として否定すべきもの、惡卽障害物なり。標準は變更すること有るべし。之に執するものは闇黑の

み惑のみ。

悪は無上菩提に反抗するも、或意味にては却て之にかなふあり。又悪は必要より出ると云ふも、譬ば寶珠は垢穢の鑛垢を除去して初て寶珠の神聖を顯示するが如し。若し無上菩提にして天然に顯示せば希有難遇の感なく神聖たること知らざらん。また天然に阿彌に契合せば阿彌に協力するの要なく、正義も無く、六弊も六度もあるなく、吾人の健闘の勇氣もなし。之を障害する不徳之に反抗する悪ありて初めて吾人は阿彌の目的に協力することの神聖にして、不正に對する正義の價値を顯はし、六度の貴重なる、吾人の健闘の勇を鼓舞して精神生活の必要を感ずべし。

惑とは、悪業即罪悪は惑の衝動なり。無上菩提即ち阿彌の終局目的に協力せざるべからざる個人が却て之に反抗せる如きの傾向あるは、即ち全く絶對阿彌の個人たるを意識せず單に個人的のみを眞の目的として自己の本然の理性を悟らざるの故に。自ら惑と云ふ。また罪悪は全く脱却の爲に有せる故に脱却せざるべからず。而も自ら惑ふて脱却すべきの理あるをしらず、脱却せざるべからざる罪悪を保存しまた罪悪の悪たるを知らざる如きは皆惑なり。故に惑の衝動より三業を活動するものは、悉く罪悪と成るなり。

罪惡とは、善惡の標準の一定せざるも常恒に進化發達する、所謂、增進佛道の無上菩提を、阻害するものを罪惡なりとせば、この罪惡の衝動は、人の世には惡の誘惑物あり道德を害すべき所謂六賊充滿せる故、之に對して寫象する人の意志情操は惡の衝動ならざるべからず。卽ち煩惱の種子なり。種子あるが故に現行して菩提の爲に障害するを惡と名くべし。其の惡の現行を生ずるは惡衝動卽煩惱の種子と名つく。煩惱に無明塵沙見思あり。今無明と見思とに就て說明せん。

無明は惑の根本なり。個人本是絕對理性の個人なるも、個人は絕對との關係を悟らず理の歸趣處を識らず、自ら惑ふて個人を根底と立て主我を執す。主我は體慾我慾の根本として我を二種に分つ。我痴見愛慢等は知力と感情と意志との別なり。唯識には末那の屬性とす。我愛卽ち主我幸福執意の一切の惡衝動の根本と名づくべし。唯識には俱生の惑と云ふ。卽ち身體と俱に具する義なり。また天然性格に出たる義なり。

俱生の惑は、世に云はゞ動物の原祖より動物生活の需要より出て、普徧的自家保存の機制よりなれり。俱生の我執に屬する貪瞋痴慢の四屬性あり。何れも本能的機制故固有性にして、また固有性の我及び煩惱は自我保存の自然より出たるものにして、純朴にしてこの間は善惡共に平均なり。

次に分別起なる主我主義發展してよりは本能に盲從せず分別意識的に主我を主張し、此に屬する貪には名利權勢榮利を貪り他の幸福を自己に呑噉せんと欲し、主我に違ふ時は理の如何に拘らず瞋恚等を起し、正知を眩惑し、己れ德ありとし、傲慢にして憚る意なく、又忿恨、嫉妬、慳悋、憍擧、傲慢諂曲、害意等の屬性あり。

また知力に屬する惑あり。所謂身見、この五陰を卽ち我なりと計度し、亦我は身體と共に滅して斷無に歸すと。或は我は一定して常に不變なりと。亦は因果の理なく善惡何れも我に関せずと。或は主我はこの機密に依て救靈せらると執し、すべて主我の幸福の爲に、眞理に非ざるも眞理なりと計度するが如きは悉く惑なり。

惡卽ち煩惱に種子あり現行あり。惡は他人の制裁に已むを得ずして現行せざるも、主我種子あらん限りは惡の主我たるを失はず。種子は機緣あれば現行し、其現行せざるは慧巧にして、而も其情操に種子失はざる間は善といふに足らず。

幸福的種子は生理機制の固有として存し、自我を保存し、之を要求するは個人意志の要性なり。相互の刺激より各個人の性を發達せしむる自然の理なきに非ず。

感覺的榮養生殖の慾の如きも、是快樂の爲にあらず正當なる目的の爲にあらば、また道德に反するに非ざるべし。

主我は俱生、人間普通の性なり。根本惡は本能に普徧の天性にして、夫より將來の變態は遺傳惡症にして、益ゝ菩提に反抗する惡力は開展して所謂人間性格を逸脫して三惡の門を開くなり。

普徧的善惡平均を保つべき世間的道德秩序に率ふは、佛敎の所謂る人間性格にして三惡墮落熟識に非ず。病的の惡と成て主我欲望惡衝動發達して固守にして治し難きに至れば所謂墮獄性格と名づく。墮落性惡卽ち病的惡、普徧的主我よりは進んで惡衝動發達し自ら牢固にして理性に應ぜざるものは病的墮落性格なり。初感覺の欲も一定の快樂は進んで習慣性をなし習慣より益ゝ發達すれば終には惡弊症に至る。感性刺激精神的の惡刺激も益ゝ發達すれば精神惡弊症と成るに至る。或は遺傳襲來して終には大罪人を出す等、其他種々の原因より病的惡性を起すあり。

個人の惡質を開展せしむる緣は外境なり。誘惑斗りに非ず常に惡瘴氣の中に住み不知の間に感染すること多し。殊に病的宗敎の流行熱には種々の精神的病狀を感染して道德正氣の大弊害起す。之に感染する原因は天然の幸福主我の心に感じ易し。團體の罪過は現時代のみに非ず、この害毒を流したる

泉源は、數時代の世襲的制度習慣が漸くに發達して、現代の罪過は遺傳罪過なり。此團體罪過は菩提の客觀界の道態の病狀にして大菩提の害甚し。團體的遺傳の惡は個人に感じて、天然の主我幸福より個人はこの流行熱を免るゝ能はず。幸福主義の病的宗教の病的準備なれるなり。

心工畫師の如く、又一切唯心造。人自由意志あり。理性無明によりて主我を執す。善惡迷悟自己の意志に規定することを得。三惡四趣四聖悉く唯心の所變、故に道德的責任は自己にあつて免るゝ能はず。天台に所謂理に十界を具し、性惡を具し、心十界として造らざるなし。

また佛教の業識とは、世に云ふ意志性格なり。此意志の決定は皆欲望の結果なり。數習は性格をなし、佛教は習慣性となす。たとへ窮親的習薰にあらざるも、遺傳的より襲ひ來るも、其元因は薰習力習慣より來るに外ならず。純粹元因理性には無定相にして、而も一切に系薰性を有し、系薰性のみならず、自己より因緣相待て活動すべき理性あり。

性格は急に變更すること無し。性格と樂欲とは、欲望は一には性格により、一には時々の意志內容に依て規定せらる。

自制菩提の安心を決定して、根本に菩提の潛伏して、衆生の爲なることを能く知りて彼に施爲する

は菩提心なり。自己の精神に自律的に自らを制裁する意志、菩提心を鞏固にし阿彌に安立す。

常に定まりて其内面阿彌の聖意の潛伏して、聖意實現すべき方面ありて、衆生の苦を見て慈悲を起し彼の苦を救ひ滿足を與ふべきの意志活動が決定せるは菩提心なり。

天然の幸福主我は自律の精神を決して、純朴なる主我より修飾の主我に轉ずるも、全く菩提心に非ざるよりは、惡は情操に存し、現行になるも惡性なり。自利的主我が却て理性を支配する主我にして理會省慮を方便としながら其目的舊の如し。畢竟全體自定は世間的奴隷たり。彼は全く主我の中なるを知らず、天然に離脫すべき理性を知らず、主我自利の基礎を立て、形式は自律的なるも、內實は天然に縛せらる。眞の我は自制に依りて、天然動機を脫して天然主我を脫す。

主觀自利は其まゝ利佗、卽ち客觀的理性目的に用ゆる者なり。菩提心は絕對阿彌を眞我の我、天然主我を棄て、阿彌目的によりて、自己卽ち阿彌の個體として、天然の我に屬せる煩惱を脫し、菩提の意志決定阿彌にありて、阿彌本來內外なきも內に安置せる聖意は客觀秩序に實現して努力するもの、之を菩提心と名づく。此菩提心缺けては宗敎實行に責任あるなし。天然の人は道德的責任をしらず。菩提心は自制の煩惱を脫却する活動の機にして、人は常に內容には自己の惡の健鬪に勇氣を奮ひ、

所謂八萬四千の念々に六賊の爲に侵害せられ八風の爲に動亂せらるゝも、眞我の城廓に自制の自光の光を放ちて、城廓鞏固なれば六賊も侵入する能はず。阿彌の中に碇泊すれば、八風もまた恐るゝに足らず。惡衝動の魔兵ほどばしり出ては、善衝動の與力を用ゐてふせぐべし。たとへ墮落病的の侵すも何ぞ退治せざるべき。

菩提の妙用又能くこゝに於て用ふべし、若し惡なく不道德なくば、菩提また何の要かあらん。炎王光の要すべきなし。天性の惡も六賊の誘惑墮落性も團體罪惡も亦畏るゝに足らず。團體罪惡あれば他の菩提の必要を感ずべく、若は個人又は團體の罪惡の薪なくば炎王の火何をか燒かん。炎王は大火聚觸るべからず、觸るゝもの皆燒かれざるを得ず。

內面の惡衝動に對する六賊突然として侵入する時は、善衝動を動機として衞守すべく、若し炎王光によつて照破し已れば、煩惱却て菩提の性なるを知らん。煩惱本是菩提、衆生は惑ふて菩提を煩惱とす。然るに天然主我幸福の人は自ら惑ふて禍を發し害を成す。

天然主我の貪欲は是不道德なり。惡なり。然れども主我脫して、菩提心となり、上求菩提下化衆生の欲望となれば、貪欲は卽ち菩提なり。瞋恚に迷沒して、害を他に及ぼすが如きは甚だ罪惡なり。然

れども菩提心の中に、正義奮然として自己の罪惡と奮戰する如きは怒奮卽ち菩提なり。邪正を辨ぜず自己の惡を惡とせざるは愚痴なり。之を反展して邪智を去り、大賢は愚なるが如く、また無智自然智は釋迦の智。大賢は愚なるの如きは老子の智。鄕黨に在て言ふこと能はざるが如きは是孔子の愚。死罪宣告に辯語智を用ひざるはソクラテスの愚。愚痴に還て念佛するは然師の愚。孔子が、之を知るは好むに如かず之を好むは之を樂しむに如かずと。感覺の快樂に換ふるに道を以て樂とせば快樂また菩提ならむ。

賢を賢として色にかへよ。愛また道に非ずや。何ぞ菩提の中に奮然として正義の旗を立て罪惡の魔軍と健鬪すべき精神勢力を、天然の人は枉げて私に瞋恚の炎として自損々他す惑に非ずして何ぞや。大我の個人として、神聖にして、無上權威をもて名利すべての爲に撿束すべからざる本心を、主我の人は、却て枉げて傲慢として神聖を害す。賢を見ては齊しからんことを思ひ、進化發達の聖に昇る衝動たるを識らず、天然の人は妬忌として誤用す、惑に非ずや。

煩惱の性、卽ち煩惱の本性を棄てゝ、何處にか菩提の本性を求むべけん。諸佛は炎王光によつて、一切煩惱を照破して、衆生が、煩惱とし罪惡とする其の性を卽ち菩提として善の方面に向て應用す。

衆生は愚暗にして、諸佛が無上大道に應用し活動する處の菩提を煩惱として其衝動より業を起して罪惡を造る。

炎王光によつて、天然幸福主義と主我とを脱する時は、從來の煩惱は轉じて菩提となり、罪惡として作業せる所作は善即ち道德的行爲と轉ず。貪瞋痴慢疑悉く菩提を顯動せしめ活動する爲の必要より出たるも、天然の人は之を誤用濫用して菩提の害を爲す。故に衆生にあつては惑と名づく。楞嚴に菩提即ち煩惱なるを喩て、經に水も氷と成るが如し、氷還て水となれり、氷水は濕性是同じ堅流相異れり。衆生は天然規定によりて氷となり、聖者は炎王光によりて水となり、氷と成るも流潤の相と濕性とは失はざるが如し。惑業已に然り苦毒また。

衆生は絶對無爲の大涅槃の理性の中に依他及び偏執の爲に生死し、天然の主我幸福主義には苦毒の感情甚だ多し。老病死憂怖は悉く苦に感ぜるが如し。

苦毒の感情も亦解脱の要を感ずべき機會なり。すべての苦惱は解脱の要を感ぜしむるなり。若し病に痛苦の豫報なければ病の治療の要を知るによし無きが如し。若し苦毒の感情なくば脱却の必要あるを知らず。故に是は是苦の解脱の豫報なること幸福主義はこの理性たるを識らず、主我の脱却すべき

を識らず、却て苦の中に樂を求む。故に顚倒の誘を免れず。苦は解脫の豫報なることを知ると共に、超越して觀じ來て見れば苦の性卽ち涅槃なり。

生死元是何物ぞ。自己の精神を離れて生死苦體あることなし。身體もと是精神の外に生死の體なし。然るに此生死の體たる精神は、天然主我を超越せば、卽ち絕對眞我の絕對、本自、不生不滅。本來不生。何の滅かあらん。

絕對眞心本然淸淨にして、主我を離るゝに於て、又此生滅の心卽ち不生滅の眞心たり。また氷の水となるが如し。若し此の苦を感ずる處の精神を捨て何の處にか不生滅の眞心を求むるか。若し此心を離れて外に涅槃あらば、何の自己に關する處あらん。絕對阿彌の炎王光によりて、天然の主我顚倒の夢覺め來て觀ずれば本來より大涅槃にして、精神の體、卽ち大涅槃。此罪惡の感情の天然主我の惑を除き去りて、覺來りて觀ずれば卽ち菩提妙淨の體なり。

法身　苦

法身に迷ふが故に生死の苦を受く。生死の苦の體を證入する時は卽ち法身淸淨

般若　惑

衆生は如來の般若に迷ふが故に無明見思等の惑となる。惡の性を識る時は卽ち如來の智慧なり

解脫　業

本來無縛の中に於て衆生は迷ふて善惡不動の有漏の業を起して三惡四趣を作る。業も悟り入りて觀ずれば卽ち解脫なり。衆生の業を離れて解脫の用なし。無明等の煩惱を離れて般若の象なし。生死苦の體を外にして別に法身の體あるなし。天然の個人は主我を脫して、絕對阿彌の中に歸入すれば、惑業苦轉じて法身般若解脫と成り、又生死卽涅槃　煩惱卽菩提。

炎王光

宗教人類――消極――理感二性の素質。
積極――靈化

宗教意識は聖意に適せざる意志惡質を排す。炎王光は、闇を照し、理性を開發するに、炎能く物を焚くを、事惑を解脫し靈化するに比す。

煩惱多しと雖も、二種に分つ、一、理惑。二、事惑。

理惑とは事の理(靈)性を覆ふ處の、煩惱、無明、所知障、見惑等、眞理を意識せしめず。

事惑は生理的の罪惡、感性意志の惡衝動なり。

前者は先天的に理性を覆ふ、別に體あるに非ず、靈性未だ開發せざる、靈性潛伏狀態を無明と云ひ後者は苦惱及び罪惡、感情及び意志の惡欲望、惡衝動にて、動物的欲望また意志、我慾、肉慾。

迷事惑（內容）　苦惱（果）
　　罪惡（因）

機制我を根本とし、動物的欲望、惡衝動を根本とし、貪瞋痴慢等。

迷理惑（形式）無明

所知障――宗教意識開發して、啓示及解脫靈化し、心靈、如來の神聖正義恩寵等智慧慈悲等を啓示せられて、無上覺の靈性を知るべきを障る。

見　惑――邪教、邪師、邪思惟より起る處の眞理に逆ひ、邪見推理の意識を云ふ。

佛教に解脫の發足點を感情の苦惱を感知するにありとす。いかに苦惱を感知すると云はゞ、人の天性は我意幸福を求む。顚倒せる幸福主義のためには世界は我意に滿足を與へず。因て苦惱と感ず。主我幸福主義の非なるを悟り宗教的意識に入るは道德的理性、苦惱は幸福主義の顚倒より感ずる處、主義を轉ずる時は苦惱の轉ずるのみならず、また苦惱は罪過の結果なるを知る時は、苦惱感情に換はるに、罪過感情現はれ來る。罪惡は無上道道德秩序に背乖する情操及び行爲にて、主觀の惡を邪と云ひ

客觀を惡と云ふ。

理性、感性二主義あり、理性主義は苦と惡とに對して甚だ冷なり。生死本幻化の如く、罪福悉空なりと感情を排斥する宗敎は、理性は寂滅の理性のみを實とし、苦と惡とに實を認めず。

感性主義は生活の內容を重んず。故に苦と惡とは實に厭惡し、實に解脫せざるべからずと感ず。

完全なる宗敎意識は理感二性を完うして一面に執せず。

三　聚　衆　生

衆生界は如來の法身を體とし、意志に實現せられたる世界相待機能團體にて、靈性潛伏す。

天然の素質を有せる衆生を三聚に類を分つ。一、天然的不定聚、二、惡なる邪定聚、三、靈なるは正定聚。

不定聚とは人の天然的生理機制の中に心理機能を含有し、天然に規定せられ、靈性潛伏せるも未だ開發すべきを識らず、天則に素性を有し、個人目的の外に終局目的に協力するを識らず、劣態なる凡

夫なり。

邪定聚。靈性開發せざるのみに非ず。脱却すべき要素質を增長し、邪惡決定、靈に背きたる性格の聚類。

正定聚。とは靈性開發し、感性解脱靈化したる靈格。理性開發するが故に形式的に法身と致一し、感性靈化するが故に如來の內容と同化し、自己の目的を犧牲にし、終局目的に協力する聚類。

神人の致一と分別

一切の宗教主體（なる人）の根底は絕對主體たる如來法身とす。されど人は自然の規定と生理機制に制限せられ、自己の根底本質に於て、形式致一の理性あることを識らず。この機制我を超えて最深の奥なる眞我を發見する時は、自己の心靈卽ち如來の一大心靈と致一なるを識る。

之を開發するは恩寵による。然れども始成に非ず、開發顯示なり。之を法身平等と云ふ。

感性は分別。人の感性は所動的內容動機。人の天然の感性の形而上根底は如來の意志に現はされた

る觀念態にして、機能團體の生理心理機能として、內容動機劣態また罪惡の衝動なり。

之を解脫靈化の爲に如來は一切智慧態より靈應身を現して、恩寵とし、之には如來の內容豐備にして、衆生の信仰に對し解脫靈化の用をなす。之を報化差別と云ふ。

理性の根底は法身にして、平等絕對觀念態、超時間、超空間、超物質、超活動、純粹形式なり。

感性は事相にて、主體に對する客體と對比的なり。人性の無明闇黑に對して智慧光明、人の罪惡に對して聖靈態。

理性は大虛の如し、絕對なり。事相報應は太陽の如く、對比的なり。

理性は形式に於て一致し、感性は內容同化せらる。

理性主義には自己の根底なる絕對主體を發見し、自性天眞佛として、宗敎の全體を盡せりと謂へり。理性に偏し淡白の狀態に陷る。譬へば光のみにて熱なき太陽の如く、內容虛無にして活動なし。

感性に偏せる宗敎は、絕對主體は實體なく、聖靈感の靈能のみを求む。熱のみにて光なき太陽と同じく盲動す。理感二性を全うして圓滿なる宗敎意識なり。理性に於て絕對主體と一致し、感性に解脫靈化す。

宗教の機能的致一

如來の本質（實體）と靈能とは、世界及び衆生の根底たる心靈界に求むべし。如來は客觀的實在にあらず、主觀々念的實在なり。宗教的關係の機能は、人の精神の中に客觀として存して、外より來るにあらず。中と云ふも生理機能の中に非ず、一大心靈と連絡せる心靈の中にあり。

觀經に如來是法界身、入二一切衆生心想中一と。

導師釋して、法界は衆生界、身は如來なり、一切衆生の統一的根底は法身如來なり、故に衆生自己の最深の根底なる心靈界に如來を發見すべし。法界は如來の眞身、心を體としまた用とす。身心徧ねくして無碍の故に、如來は絶對主體にして、一切衆生は局部的主體、如來と衆生との宗教的關係は觀念的機能致一なり。自己の心靈と一大心靈との關連なり。

如來と衆生との分別

如來は絶對心靈、衆生は機制的個體。如來は一切を總括する存在、衆生は局部有限相待團體、此團體は心靈局限を有し、因果と目的とに現ずる理性あり。

個人の自定は、因果的にして、直に如來より定めらるゝにあらず。秩序の論理的必至は、法身の理にして、個人の心靈の終局目的の理性は如來の理性なり。

個體機能團體の變化は絶對心靈の統一總體に於ける局部變化なり。

衆生は法身の機能的顯現の一小局分、全體は法身なり。又機制心的個體は法身の性能に産出せられたる機能現象なり。

人は依他、偏計の二性帶る機能。法身は圓成實性。

偏依の二性は如來の實性を離れては無本質なり。相待に對しては實在なり。各個體は局部現象にして、實性を具ふるが故に實在なり。

産出の根底たる實性に對しては無本質なり。若し如來を離れ如來に背く時は幻華の外得べきなし。

如來と衆生との致一

人は分別ありて解脱の要あるも、致一なければ、宗教の能なし。人は偏依の二性によりて如來の本質と分別すべきも、二性の根底は實性なり。實性は偏我機制我と、相待規定の因緣我との實性なり。實性は一切局限主體を組織し、世界相待團體の總體根底なり。根底をなす限に於て一致せり。

宗教關係の致一。自己の根底如來の本體と致一なるを覺悟したる人は、內容は惡なるも、形式の致一を識るべし。形式の一致を覺るのみにあらず、內容が天然の不定と邪惡とを轉じて、如來の聖意內容に相應し、終局目的に參して、始めて眞實の致一なるべし。

形式の致一は、理性開發し、覺悟すべきも、內容の致一は、感性意志の解脱靈化によりて得らるべし。

內容を事相と云ふ。如來に報化の二身あるは、衆生の內容解脱靈化せしめむが爲なり。如來の大用

恩寵により、知見を與へられ、感情に融合し、主我の妄なるを識り、大我に融合し、意志靈化して、如來の目的を自己の目的とし、如來の器具として活動す。自己の理性を開發して、自己全く圓實性と致一なるを悟り、如來の一切慧能によりて、主我及び世界相待の中より解脱し靈化して、如來の目的に參與すること、形式致一は理性にして、內容は感性が如來の報應と相應す、

已に主我を脱し、相待を超えて、實性を性とし、內容には解脱靈化の德として、如來の目的を自己の目的とするに到れば、卽ち正定聚なり。正定は不退は不退の菩薩、如來を理想として、人類個人を超えて、如來を家とす。菩提薩埵、菩提は如來の大道薩埵は有情卽ち如來の觀念を實現せんとする正士の義なり、觀念我にして機制我にあらず。

世界の所依

世界は人類共同感卽ち一切機能團體の依止する處、而も衆生と同じく、相待に規定せられ、絕對なる法身を體となす。

楞嚴に世界微塵も心を以て體と爲す。地水火風空大法界に周徧し、如來藏の隨緣循業の發現なり。即ち絶對心靈の意志に實現せられたる客觀々念態なり。

一、自然敎には自然界の外に世界の實體を識らず、二、超然敎には世界と實體とは、其體を根本的に異れる二元とす。實體と幻夢の世界、能造と被造と。

理性敎と感性敎とあり。理性敎には實體は絶對に全うし、世界は實在を無にす。感性敎は神の絶對を害しても世界の實在を立てんとす。感性敎は神の能力の方面を取て實體を忘る、世界は神に造らるゝが故に實在なり。

理性敎は實體のみを神として、感性は神の能より實在なるを識らず、故に現象世界は、根底なき空華の如しと。二敎何れも偏して完全なりと云ふべからず。

圓具敎は理感二性敎を統一し、世界の實體は理性敎と同じく絶對にして、世界は絶對心靈が意志に現されたる客觀々念態にして、實性を根底とする實在なり。

三性の中に世界は相待依他性、相互爭鬪の實在にして、實性を體とするが故に實在なり。若し實性を離れては因緣無性の故に實在に非ず。

故に世界は實性と依他性との二面あり、依他因緣性の方より見れば因緣を離れて、無性の幻華の如くなるも、實性による依他なれば實在的。

實性は一方は永恒不動にして、他面は世界依他性として、隨緣顯動なり。顯動なる世界は、依他の故に實在、無性の故に無なり。

實性は顯動して世界依他性となり、依他は意志の勢力に妄動せらるゝ故に變轉極りなし。

依他性の世界は實性隨緣を體とする故に實在、因緣無性の故に假有なり。

世界は天則秩序に神の一切知と一切能によりて顯現する法身の客觀的現象。

神は世界に對し一切能より常恒建設の事業なるも、之を建設するは因緣規定あり。神は絕對なるも世界は相待に規定せらる。

世界自らは、因緣無性、存在の形式のみにして、神の實性の客觀實現に、一切知能によりて生存擔保せらる。終局目的には、攝取には、生滅に常恒產出を以てしたるに同じく、終局には、統治に換るに、心靈を開發して神的協力となす。世界の常恒不斷の顯動は、實性離れては體なし。故に世界の活

動は卽ち實性の活動なり。一切の被造作は法身の絕對機能なり。

終局は世界內容の常恒なる理性終局目的秩序。

神の一切知と能の機能致一より、神の觀念の顯動內容は、意志に實現せられたるが、生產に意志に實現せられし內容は、論理的一切慧に決定せらるゝなり。世界は法身隨緣の常恒現象なれば、法身の本質は世界に含蓄的なり。

世界と心靈界

世界は相待規定、法身の意志に實現せられたる客觀々念態にて、心靈界は本質に內容の無明垢質解脫して、本質一切慧の靈象なり。

世界は、太陽系に屬する機制的個體は意志の勢能に逼出され、相待規定なれば、機制的個體なり。人類と同じく成壞を免れず。全體より云はゞ、法身無邊の故に現象の世界無終に至りて、成住壞空、空じてはまた成じて相續無終なり。如來藏性無盡の故に產出の世界も無盡なり。

解脫の靈能の世界

世界は解脫を總括する故にまた大なる宗教の主體なり。世界には消極積極の二面あり、消極としては、世界には人に煩惱の垢質あると同じく、脫却せざるべからざる惡素質あり。絕對本質の心靈態を覆ふ處の無明及び意慾動搖の相待的の約束をなす性能の存在するは、この無明及び業力によりて、惑業苦これなり、これを脫すれば絕對無規なる本體。

積極には、世界は宗教の能ある法身如來藏性を體とし、靈性を具せる一切の總括にして、この靈性を顯現すべき解脫の能ある世界として方便有餘土とす。

相待なる世界は絕對なる心靈界の終局目的に對する方便土とす。

世界は法身を體とし、無明妄動の爲に、相待の束縛を受く。無明妄動は、一切慧の光によりて照破せらる。

世界は法身を體とし、無明は轉ずれば一切慧となり、一切の惡業は轉ずれば目的に協力すべき靈的活動と爲る。積極より云はゞ世界は法身の機制的現象にして、相待より絕對に、世界より靈界に、進趣すべき方便土なり。

相待虚無の苦惱は滅了すべき性を有し。

世界は幸福主義を轉じて方便土とし、菩提の道場とする時は、此土は忍辱精進の行處、菩薩の諸の行道の處なり、各自の潛伏せる靈性を顯はす爲に練修の道場なり。此土に於て一日一夜忍辱精進なれば、淨土に於て百歲するに勝れりとは深意あり。

世界厭欣觀

世界は解脫の要と能との二面あり。解脫の要ある世界として厭穢、解脫の能あるとして欣淨と云ふ。

一、顚倒幸福主義には最惡觀。二、宗教に入りて未だ解脫せざる時は濁惡厭惡觀。三、已に宗教に入りて解脫し心靈界に安立する時は最良觀。四、道德主義には悲壯、遊戲地。

人の天性は主我幸福の顚倒により、身の不淨を淨と、受を樂と、心を常住と、天然を自由なりとす

然るに世界の天則はこの顚倒に對して假借なく、幸福主義には違逆することのみ。意志に滿足を與へず、爲に世は惡のみと觀ず。

次に宗敎に入りて道に志す時は、世は自己の意志にも外にも惡の動機充滿し、五濁惡世は實に厭ふべき處と觀ずるなり。

三、正しく宗敎にて解脫する時は、身は五濁に在りながら心靈は淨土に安立し、心靈の幸福を感受するが故に最良觀なり。

四に已に心靈淨土に安立し、如來の目的の爲め、慈悲の故に道德主義には菩薩は濁惡に出で衆生を度す。忍辱精進の爲には濁惡の世に好んで甚深悲壯、濁惡世に於て行ずべき故に、大人志幹は好んで惡世に出で度生す。

また遊戲園林地の時には菩薩は濁惡の世に忍が成就し、大悲薰心遊戲地とす。論註に、往生を欣ふことは快樂の爲にあらず、一切衆生を度せんが爲。慈悲と度生の目的の爲には樂欲の地なり、解脫の要と能とは宗敎の目的なればなり。

解脱すべき世界の素質

絶對なる如來の實體本然清淨と、相待に生滅せる世界と比する時は、本質には本來あらざりし幻夢の如き無明より現ずる相有す。

世界は無明の風に妄動の業力によりて有るも實性にあらず。無明滅すれば、業滅し、業滅すれば生滅世界を感ずべき元動なし。

眞性にあるべからざるもの妄動力によりて幻有なりと。無明妄動とは天則に一切能卽ち意志なり。實體の潛勢より顯動に轉ずるは意志を開端の契機とす。恰も人の初生、意識的意志發展せざる時、不識的意志なると同じ。世界は一切知によりて天則の秩序は整へらるゝも、不定なる意志動力より開端とす。之を無明と云ふは一切慧未だ開けざる意志は不定の動力なればなり。

業動力によりて現ずる處の世界に生死變遷の苦、無明等の惑あり、無明によりて諸の惑あり、業あり、生死苦あり、因果關聯して止まず。

曾て惑業苦に實を執したりしも、覺め來りて觀ずれば、五受陰皆幻化の如くなりと知る。

尙進んで、生滅幻化の世界、本體は實性にして、生死は力の運動によればなり。

世界は實體の現象にして、力に現されたる相待的に、解脫の要とし能として。

生死の體は涅槃、煩惱の實性は菩提なれば、曾て方便として必要なりし素質は、其實には脫却すべし、無明は眞性、覺來りて觀ずれば、眼醒めて昨夢の如くなるを知る。

初、世界生滅の苦及惑は實在とするは天然

二、無明惑業（にして）幻化無性

三、世界、業、本菩提。生死本涅槃（轉依）

第三に、世界は意欲不定意志活動よりあるべからざる素質惑業苦を感ず。之を斷盡して而して解脫の最終に達するに非ず、一切慧によりて終局目的の心靈開發する時は生死の體本涅槃なるを悟り、煩惱本菩提なりと達す。

曾て妄動的の惑業は未だ心靈開發終局の眞理達せざる爲めにして、心靈開發して觀ずれば、法身の表德の世界にして娑婆卽ち淨土。

如來中の意志によりて實現せらるゝ世界なれば生滅轉變また如來の妙用なり。

解脱の世界

大乘菩薩とは個人にあらず、一切衆生及一切世界を悉く解脱すべき宗教主體とする一の觀念的なり。菩薩は一衆生乃至無量の衆生を度せん爲に菩提心を發すに非ず、一切衆生乃至世界を度せんが爲なり。菩薩は國土を以て身とす。菩薩とは覺有情、上求佛果下化衆生是なり。

衆生の病我病なり、一切衆生病ある故我病あり、一切衆生の外に我なしとの一の宗教的理想なり。人は神意の器具にして、目的を實現するが爲には、いかなる苦惱も甘受せざるべからず。菩提心は一切衆生同體の故に法身個人が身を犧牲的に六度を行じて肉體死すとも觀念は數多の形の中にありて活動す。

同一理想の中に隊を伍して健鬪し、身は死すとも觀念の勝利を以てし、觀念が世界の苦惱と罪惡に打勝ち、菩提心を生命として之が爲に肉を犧牲にすることを厭はず、甚深悲壯の、假令身を諸の苦毒

の中に止むとも、我行は精進にして忍んで終に悔いず。個人の生命は全體觀念の犧牲とし宇宙解脫を目的とす。

個人解脫を主とするは聲聞とて嫌忌せり。菩薩は宇宙解脫を我解脫とす。菩薩は大我を我とす、宇宙を身とす。衆生あらん限りは、苦惱と罪惡は絶ゆることなし。度斷の誓の菩薩一切衆生を度せずば我成佛せじ、衆生盡さざる故に菩薩の願も亦盡きず。

然るに圓融無碍の法門は、因果無碍にして、菩薩成佛する時一切衆生悉く成佛し乃至世界も成佛す、卽ち一佛成道、覩見法界、草木國土、悉皆成佛。

相待規定を脫し、心靈無碍の境に入らば、絶對なる理法と一切の個々と、圓融無碍の相卽相入、自在の故に、因門には盡未來際普賢の境界常恒に菩薩の願行を普く一切世界に施す、果分には無始已來ビル十佛自境界一切衆生と共に成佛す。かゝる心靈界不可思議の妙門に入らざれば、神の境界解すべからず。相待規定の約束的に、宇宙の終局滅盡は時間的に期すべからず。實體無盡の故に現象また無盡、但し精神の轉ずる處に世界滅盡す。世界滅盡し已て後心靈顯現すと謂ふなかれ、如來現前する處に心靈界顯はる。

十二因緣

一、無明。過去の無明心を本として、一切煩惱生して生死の源となる。人類は生物の盲目的意志より進化せしもの、故に個人は再び之を繰返す。

二、行。煩惱に由つて善惡の業を爲し、身を六道に受けて變作す。倫理と生活上の向上向下は自己の行に依る。

三、識。業に依つて造られたる識が母胎に託する一刹那。向上向下賢愚の性質は父母より其生命と共に遺傳す。

四、名色。神識が母胎に託して父母の分ちたる形質と合す。精蟲卵子との兩性の形質和合して胎兒となる。

五、六入。胎兒七日毎に變じ四十週にして六根かたちつくる。娠中の母の身と心の持方は其胎兒の性質に影響を及ぼす。

六、觸。兒生れて初め視聽未だ感ぜず唯觸覺あるのみ。小兒母の懷にある三年體育上に大に注意すべき時。

七、受。兒童の心は白紙の如し其薫陶の如何に依て善惡種々に薫染す。家庭學校及び周圍の事情の薫を受けて其習慣性を造る。

八、愛。十四五歳より衣服資具類及び男女の事等に愛戀欲生ず。相愛の間に於て感化の力によりて結婚後其性格を一變すと。

九、取。家庭及び外界一切の境を執着し、其目的の爲に執して善惡一切の行爲を爲す。

十、有。其執する處善惡の業を成就し、三有の果を引べき力を有す。向上若くは向下したる自己の身心の本質を其子に遺傳す。

十一、生。善惡の業を有せる種子識が未來苦樂の生を受く。父母及其祖先の形質は其子孫に遺傳す。向上向下は各自の責任なり生命を父母に受く、人生は向上すべき責任を帶て生れたり。

十二、老死。人生の行路幼より老に至り、苦樂幸不の中に未來の因を作る。人生の競爭場裡道德上生活上其勝敗は其心行に因る。願くば道德上名譽の月桂冠を戴きて凱旋せん業を後昆に讓れよ。

十二因緣

無明。

輪廻生死の一大原因は無明である。無明とは生の眞理をさとり得る心靈の光明なきを以て自己を知る自覺なきなり。凡夫の心は無明であるから、生の從來する處死の趣向する處を自ら知らず、冥より冥にさまよふは、蓋し心靈の光なければなり。靈性の光なけれども、神識は活靈物なれば、靈的無明にて生活々動す。無明の神識の奥には佛性てふ靈性が伏在すれども、啄磨せざる珠と同じく、未だ光は發せざるなり。

二乘及び佛陀の大聖者は已に其靈性の光が顯ははれて十方三世に精神の光が照す。聖人は已に靈性が覺醒し心明覺となり、凡夫は靈性覺醒せず無明に眠れり。

聖人と凡夫とを喩ふれば小兒と大人の如し。人生れて孩兒たりし時は精神意思はあれども不識的意思にして人類としての意識未だ發達せず。故に已に成人に比ぶれば意識的意思は眠りて未だ覺醒せざ

るなり。身體と共に精神が發達して意識的に精神が活動するに至るは人性が覺醒したるなり。故に小兒は人性の無明である。小兒は不識的意思にて泣く動く哺乳す。精神あればこそ動く。然れども不識的精神である。

人類及び六道の衆生は佛陀及び聖者に對すれば靈性未だ覺醒せざる小兒である。

故に無明と云は靈性覺醒せざる精神のことなり。盲動的精神なり。不識的精神なり。此の無明的精神を識心と云ひ靈魂と名づく。

之が生命の一大原因となりて活動するを行と云ふ。この行爲によりて精神が種々に轉變す之を業識と云ふ。無明を因として次に行を起す。

行。

行とは行動なり。また行爲なり。卽ち業行なり。此行動には、無明の精神の活動、卽ち生理的衝動と云ふて、活きんとする元氣あり、こは人類より已下の動物にありても生理的衝動として、活きんとするには二種の職分あり。一に榮養と二に生殖である。榮養によりて卽ち自己を保存し生存し、生殖によりて自己の種族を保存す。此二種の職分は生物の普遍性にして、いかなる生物も生くる物として

此の業を務めざるはなし。生物は各其職分をつくし其業作によりて其本能の資性を益々發達す。本能に資質を具備したりとも、若し專ら業作行爲なければ自ら發達するものにあらず。

生物の元因たる本能には六道何れに向ても發現すべき性質が具りて、其のつとむる各方面に向て發達す。喩へば人間の精神及び身體に於て、其能く使用する處の機能は益々發達する如く、無明の心識は其行業に隨て種々に變成す。

活動の心識が業に從て六道に變化す。六種に變成する處の規定は因緣所成なり。之横の因緣に規定せられて六道に變ず。活動の心性が自己に活動せんとする元氣の有せるは元因にして、この元因の心性を種々に變成するものは助緣を待つ。例へば子を生成するに父の種性を原因として母の養成を助緣として人を生成すると同じく、また兒童を敎育するに家庭と學校と及び周圍の境遇に規定せられて種々の性格を成す如く、自己の生得の資性を元因とし周圍の境遇を助緣とし、此因緣より業を作して六道を造作す。其人の生得の資性と境遇の緣とが相應ぜざる時は其資性を充分に發達すること能はず。

行に由て六道を造る因緣は、こゝに原因たる資性が、惡に傾き易き少年あり、此少年を完全なる惡人とせんに、或は家庭に置きて、また惡友と惡緣とによりて、此の少年を完全なる罪惡人と鎔化すべ

き機關あらば、此の少年は遂に大惡人となり恣に罪惡を犯す。殺人强盜詐僞放火等の罪惡を犯してなりとも己が惡欲を充しめんとする。其罪惡は屢々犯行するに隨つて益々惡性惡習が性となりて、遂には全く逆惡邪見地獄の性格と及び地獄墮獄の因緣成熟するに至るべし。假令資性に於ては最も邪惡に傾き易き質を具備するとも、家庭教育及び善友等の周圍に於て、罪惡に誘導すべき機關缺乏し、唯善にのみ誘導せらるゝ時は完全なる善人とはならざるも、邪惡の行爲は遂に能はざるべし。

人々善惡六道何の方面にか傾き易き資性は本能的に具したるも、其緣に隨て六道の性格と行業とが成熟すべし。上に在て暴惡の表現たる夏の桀王殷の紂王の如きまた下に盜跖の如き、洋の東西を問はず何れにも此の模型に屬するものは、何かの因緣によりて斯る邪惡の性格と行爲とを完全に發達せしなり。之が原因とそれを完成せしめたる助緣とがなかるべからず。彼等は殘酷非道逆惡の性格と行爲とに緣つて墮獄の資格を完成せしものなり。

屢々する行爲によりて習慣の性を成す之れ性格なり。既に性格に於て邪惡と化成する時は良心は痲痺し自己の罪惡に對して良心の呵責を感ぜず。所謂る自己の惡臭を感ぜざるの諺の如く諸の罪惡發達して、之は自己の格を莊嚴する金箔の如くに感じ、自ら罪惡行を誇るに至る。ここに至つては已に墮

獄の性格成熟したるものとす。

識。

識とは已に過去の行に由て成熟したる業識が過去の身を離れて現在の身を受けんが爲に、緣に催されて母胎に托せんとするの一刹那、形を離れたる中間を、過去の身を離れ現世の身を得ざる一刹那を識と爲す。

識は已に本來六道に一定したる靈魂なるものに非ず。卽ち是は人間の魂是は畜生の魄として本來特殊性あるに非ず。本來の心識は卽ちアラヤ無明の靈活心性にして善惡何れにも成り得べき、隨緣の業に隨て種々に異熟す。水の方圓の器に隨ふ如く、また白糸の染るに隨て種々の色を爲す如く、人が本能的に、是は官吏の資性是は農夫是は職工と定りたるにあらず。然れども生れてより數年間の修養の結果として、境遇の緣に隨て或は法律家となり或は軍人となり又は農夫となり或は商人となりて已にその業熟する時は一定して資格具備するに至るが如し。

人の一生の善惡の業はつひに其性格に隨て六道の識を成す。この識は行業の結果なれば之を業識と爲す。また異熟識と名つく。是を華嚴には心は工畫師の如く種々の五蘊を畫くと云て、心業の如何に

由て未來の身と心とを六道十界種々に造作す。

過去の身形を辭して現在の色形を受くるまでの識には形無しと云ひまた有りと云ふ二說あり。此中間を中有と云ふまた中陰と曰ふ。

いかなる形式を以て轉生するか。三種の愛生ずと。

三種の愛とは一、境界愛。二、自體愛。三、當生愛。

初め境界愛とは、人自己の命數已に盡きて生命終らんとするに臨みて、先づ生の理自然として其精神に感じ起すものは境界愛とす。卽ち五官に感ずる所の萬物に於て、從來我所有と執し來りし處の妻子看屬より一切の資具家屋衣服より其他自己の嗜好品に、我所の念に驅られて凡ての物に愛着の念熾なるを境界愛と云ふ。

二、自體愛とは外界を緣する念は收りて次に第七の我愛執の自體を愛する念熾に起る。是また生理の自然にして、自體をば我所有の最愛なるものとして執着し來りし此身體を今や離れんとするに當りて、凡夫の情として自ら愛着の念切なる之を自體愛と云ふ。

三、當生愛とは已に五六七識は收りて當に終らんとするに臨んで唯殘るものは第八アラヤ識が業力

の爲に感じ來るものは、業已に熟し、因緣已に成つて現し出すものは當生の境界なり。當に生れんとするには父母の因緣を藉らざるべからず。緣つて當生の父母の相眼前に現し來れり。其當生の相は其業に隨て六道何れにか感ず。今暫く一二を示さば惡業已に純熟して地獄に墮せん人ならば自己の心中に夢の如く感ぜん。先づ惡人の終りに臨んで病氣の爲に劇苦身に逼り斷末魔の苦しみ云ふべからず、炎熱燒かるる如し。時に謂らく若し冷水淸める池あらばこの熱苦除くことを得べしと念ずる時、業力の所感として、淸凉なる澄水湛々たる蓮池現前せり。歡喜に堪えずして蓮池に身を投じたりきと思ふ時、正に此命終りて一息再び還らず、彼の池は忽に變じて、炎々たる火事と化す、火事にて直ちに地獄に墮す。また業已に定りて畜生に生ぜんものは卽ち感ず、夢の如くに當來の父母たる雌雄の兩馬春期の相の現るを見て便ち愛欲の念を起し忽ちに其心念は馬胎に投ぜり。また人界に生を受けん者はまた夢の如くに父母を見て愛念を生じ、已に托生するに及んで從來我身と觀じ來りし形骸は郊外に棄つべき老廢物に過ぎざるに至る。業緣種々ありと雖も愛に由りて托生す。之を當生愛といふ。托生の一念を識と名づく。

名色。

因緣已に成て母の胎に托す。過去の業に熟し來りし識を名と名づけ、父母の遺傳の形質を色と名づく。識と形質と合したる時なり。

無明盲動の活識は種々の行業を起しこの業行によりて業識を成す。無明と行とを過去の二因として識、名色より受に至るまでの五支を現在の五果と名づく。

親子の關係は親子の因緣熟して識が母胎に托して生を現在うくるにつきては其因緣投合して親子となることを得。例へば等流因等流果とて過去に於て人生のうち福有なる業を以て其神識を成熟せし爲に福貴なる父母の家に托胎しまた腦髓の豐富なる宿業によりて健全なる腦髓の父母に托生する如きこれを親子の因緣投合すと名づく。これに由て生を受く。これ因緣和合せるなり之を等流（とおる）の因果と名づく。

觸。

托胎したるアラヤ識、即ち無明の心識が、過去の身心に於て經驗し記憶し來りし第五識六識七識の經驗も記憶も已に還して、唯一切の業を貯蓄せる無明識のアラヤのみが托胎し、この身體を受くるとして、其父母に遺體を稟け、現在の身心に於ては新生にして、未だ一點だも印象なき白紙に過ぎざり

し胎兒が、初めて分娩したる時は五官の形あれども未だ視聽等の感覺は不可能なり。只此時に於て初めて感覺すべきものは身體の惣體なる觸覺あるのみ。初生の當時は未だ明らかならざるも惣體の觸覺は感ぜらるるものの如し。いかにとなれば初めて分娩せる兒も冷き物又熱せる物の觸るれば忽ちに聲を發して泣く。初生を觸覺の位と名づく。

當時は本能的に體に觸るるもの若し其身に適すれば眠り適せざれば忽ちに泣く。故に產浴を施さんには先づ其の小兒の自然に適する樣に抱くことに注意すべし。初生の兒の爲には注意すべきものは哺乳を以て榮養することと觸の溫煖宜しきを得べき衣服及び保傳の方法なり。この時は精神の智能を養ふべき要なく只身體を健全に保養すべき一あるのみ。之を觸位と云ふ。

受。

別しては感覺惣しては此時代は一切受納の時代なり。生理の自然として內部の機能はますます發達し五官も發達して外界の事物を見聞し、小兒生れて初めて何分かに感覺機能が發達してより愛の生殖機能の發達せる時代までを受の位と云ふ。凡ての感覺より知識經驗研究等の愛は生涯に互る。こゝに云ふ處の受の位とは生殖機能の發達する時代までを云ふ。

小兒初めてカタコトを云ひ初めて歩行する時より此世界のすべての事は皆彼等が爲には見る物聞く物一として珍しからざるものなし。

亦此小兒より嬰兒童子の時代は自己獨立の身心發達せしものにあらざれば、父母及び周圍の力によりて生存し又身心共に發達せらるる者なれば受動的なり。故に此を過去より受たる現在の果と爲す。

已に成人期に達すれば、現在自己の活動が未來の原因となりて善惡苦樂自ら造作すべき力を自己に有す。されども受の時代は然らず。自己に全く自己を支配し自己を發動し獨立自營の格は未だ有せず受用時代また修養の時期なり。身心共に父母及び他人の保護によりて維持す。此時代は性格を善惡邪正何れにも養成し得べき折なれば尤も大事なり。此時代は個人的性格を善惡邪正六道何れにか熔化し養成すべき期なるを以て、其父母たる者又師保たる人宜しく注意し其教養に力を竭して忽にすべからず。是性格を六道何れにか其方向を定めしむる時なればなり。偉人天才が他の教示を待たずして自ら自己の天才を發揮する如きは例外に屬すべし。

人の體と知と德との三機に於て何れも其養育を怠るべからず。また此の受の時代は模倣性が幾にして周圍の人の一擧一動悉く好んで之を模倣す。孟母が其子軻を能く薫陶感化得せしめんが爲に其居を

三遷せしも此時代なり。若し此受薫の時代にして其薫陶を誤る時は遂に地獄鬼畜の性格たる第二の性を造りてまた終生挽回すべからざるに至ることあり。賢母と及び教師が有爲の英雄を造作するは此時代を逸して得べからず。

愛。

愛に動物的の愛と人類の高尚なる愛とあり。深遠なる意味の愛を養ふには人類は他の動物と異にして愛が深くなる樣に養育せらる。生れて三年は母が乳房を哺めて成長するに慈愛に富める母親が晝夜の分ちなく小兒に注ぎつつある愛は自然と其兒に愛情を養ふ所以であると。

トラモントの說に、人の親たる者他の動物に比して養育する期の永きは、親の愛情を小兒の心に印象させて小兒に愛情を涵養し高潔深厚なる愛を有ち、社會的生物たらしめんが爲なり。受の期に於て父母に涵養せられたる愛情の根は深くして身體の發育と共に成長して愛の機が稍成熟せんとするに臨んで愛情の蕾は將に綻びんとす。

經には愛欲は是生死の根本なりと。寔に是愛欲の生物に存する、生理の自然にして、異性に對する愛欲なかりせば生物の種族は斷へ果つべし。生理の規定として生物に存する愛情の暖氣は生命として

存せり。

生物は愛なる熱情が消え失せなば、再び萠芽せざる草の如く春來つても彼等は春を覺らざるならん。されば人はたとひ闇憺たる囚屋に囚はれて枷檳に身を繫がれ死に瀕せんとする時に臨んでも最愛の妻が溢るゝ情蘊れるを内心に感する時は冷極りたる獄内に一箇の煖爐は胸裡に溫かなりと。

愛に子に對する愛、夫婦の愛、子より親に對する愛、兄弟姉妹の愛、また博く衆を愛する如きあり。今は母子の愛別しては男女の愛の如きを云ふ。

ウーランドの詩に三青年と題して愛の深きを詠めるあり。三青年ありてライン河を渡りて其途中の酒肆の椅子によりて、さてこの店の酒は殊に好きなれども、家の娘は如何にと尋ねければ、母なる女曰ひけるは、さてとよ御尋ねの娘のことは此頃病魔の爲に侵されていまはあの世の客となりて未だ死骸は奥の室にありと。之を聞くや、三人の青年は交る〻〻奥室に入りて棺の中なる美しい娘を見る。甲はああ美なる哉若し生存せるならば我はいかばかりか深く愛するであらうと。乙はああ美しき女子かな、生存する時に私の愛の深さはとても言語には能はざりしほどなるに。丙はあゝ美しい女、生存せし時に眞實に予は汝を愛し死すとも永久に吾愛は變ることなしと。

取。

取は執着執意のこと。執とは愛戀の已に成熟して固定したるもの。愛は感情の作用にて取は感情と意志とに互りて深く內的に根底を成すものにして又愛の根ふかきものとも云べし。愛が全く根を成して執心となる時は容易に除き難し。妻子の如き、また有情非情に拘らず、自家の所愛の境に對して執着して捨てがたき心なり。愛と取とは何れも生理の規定として生物に具はる性能なれば己が愛する物を執着す。夫婦の如きは本其體を異にして双方相合して一の生殖の働きを爲す如くなれば、原始動物の如きは一身に兩性を具有したりしも、生物が稍進化するに隨つて兩體と分れたり。然れども生殖作用に至りては兩性相交つて一人の兒を產殖す。故に此兩性は同體の分兩性とも云ふことを得べきなれば生殖に付きて兩性共に片體たるものなり。然れば生理の自然として卽ち因緣として相互に自己の異性方面なれば相互に親愛相愛すべき理存せり。而して其愛の固形物たる執意に至つては、唯感情として愛するのみにあらず、目的たる種屬保存の理よりして觀るも、相互に自己の片體として執着すべきは理の自然なり。執着に目的物を愛して未來いつまでも捨つること能はざる心意なり。人其の愛する物を執着す。

夫婦相待ち因緣相倚つて一家を成す。一家の中心は夫婦にあり。一切の衣食住すべての資具は一家を成す夫婦の目的を達せんが爲の附屬品なり。人の意志は目的物に執着して妻子及び一切の家具財産に執着す。

十二因緣（註。七五調的）

太陽系に繫がれる地球は宇宙の無限なる海に立ちたる泡の如と、我等此地に生を享け幾億無數の生物の〇〇られず我にして實に果敢なき極みなれ。生物原始の當時より乃至人類に至るまで世を經たること數もなく進化の階級きはみなく、たとひ無量の代々を經て種類は如何にかはるとも、生理の心に一系の綿々として續がれり。

衆生の原心は無明卽ち生理衝動、生物原始のアメーバにも有する精神生命、理には如來法身の性より分れし性を具すれど、佛性具有は理のみにて無明の盲に生命を活んと欲する氣味あるを無明。

生理の根本は微粒未だ動植物と分たぬを、微粒に有する無明より、彼本に具はれる己を營む欲性とまた自衛防禦の能力あり。么微の蟲より乃至すべての動物に己を養ひ敵を禦ぐ防禦避難のつとめあり。不識にあれども自ら生理の衝動を心とせり。意識的なる人類に益々我欲發展し、己を營む職分はすゝみて貪る欲となり、敵に對する防衛は瞋となりて現はれぬ、生理衝動と盲動と人の愚痴とはなり

にけり。

此三毒の煩惱は原始の微蟲にも具はりて、進みて人となりてよりいよいよ意識に發展す。人が始めて胎内に宿る精蟲にも生理衝動具はれり、即ち三毒の種子あり、生理の欲が母胎にて養はれて産まれ小兒生れて始には不識の意思、初めに感覺發して漸次に感情發達し、理性の意志は人の成熟したる時にあり、人の性たる理性具すれど未だ幼稚なる兒には潛伏態にして生理の自然に活動す。小兒は無明の中にして、夢の中なる夢。

人に天と理と靈の三性已に具はれり。天性は感覺、生物生理の欲などは動物共通性にして生物界に互るなり。理性未だ發せずば只性慾に驅られては自己の慾のみにして、他の動物の本能に盲從するより甚し。意識的に利用して我性慾を貪るは害他妄他の所爲にして無明の中の惡なり。人道照す理性にて自ら修めて自らの生理の慾を抑制し動物意思を御し、人類としての道德の秩序を正しく行ひて、常識の良心を中心に己を照すは理性にて、人道の明き人にても精神の奥の靈性の光が未だ發せずば、小我の迷智に惑ふなり。

無明は生理衝動、惑性即ち煩惱の、自然不識の意氣にして、此無明心に一切の善要邪正十界三千性

相具備せり、例せば植物の種子に胚に有せる性分が水熱の縁に資けられ萠して根莖となる如く、無明の心に生物の善惡邪正一切の本能性を具備して無數の性相備はる。外界の縁にたすけられて種々に顯動し、無明生理の衝動の外部の縁に應化して混沌一素の無明なる一素に胚せる性分は外部の縁に資られ、種々の分類に變化して世界に布ける一切の生物界と現はれぬ。

一切生の理には一定したる條理あり。例せば生理の自然には天則に規定せられ、千差萬別複雜極まりなき萬物に一貫したる條理あり、すべての條理は悉く因緣因果の規定あり、本來自然の理法をばさりとも知らぬ、無明。

業（アラヤの勢力、業と云）

煩惱即ち生理衝動の煩惱心に衝動に自ら活動する力用あるを業と云ふ、此衝動が因緣に隨ひ種々に發展す、無〇力を業と云、之に活潑に自動の性ありて、自己の性に適する生理盲性力業が自發自動に發達す。此活動は生理に順應する方に發達する勢力なり。例へば身體の各部分も活動すれば發達す。其活動の動機には種々の因緣多し。或は雌雄淘汰また自然淘汰、また永く活動休止せる部分は機能つひに敗亡す。人の身體機能累代使用せざる爲め活用長く廢せるは不隨意筋肉の類なり、生理の縁に規

定せられ使用する機は發達す。

業は生存競爭の戰場に立ち健鬪し、外部の刺激に克たんとて益々活動して進む。生物原始の蠕動の當時も既に競爭のことに活動止まるなく自己勝たざれば敗亡す、身命賭しての戰爭に、互に進化の因緣は、己に有せる業力が外界の緣に順應し、種々の方面に向ふて向上進化して、地上に分布の生物種類數なく發達の程度も階級幾多なり。生理衝動業動の因緣かぎりあらず、外部身體の種類のごと內的生活心意の種々に分れし品類はいかでか數へ盡すべき。

衆生の心識に惡善邪正六道の性能本自具すれども、そは善惡何れにか活動つよき方面に益々發達することは、身體機能の部分が用不に發達なすごとし。たとへばアルコール性が感覺性を刺激して屢すれば其機能が痲痺して量を增ざれば感ずる性がなき故に已にますます進むごと、すべて六欲の官能は屢爲れば發達す。蓄財益々進む時愈々趣味を感ずごと、肉欲我欲は積るにつれて進むなり。たとひ好まぬ業にても屢爲ればいつしか性が變じて好きとなる。人の心機は善惡の作業はすべて作爲するも、屢々作業を積む時は習慣が性となり、惡も轉じて善となり善も變じて惡と化す。心機が種々に變ずるは卽ちアラヤの異熟性、因緣業作の緣により種々に變じて順應す。自性に善にも惡にも、增長すべき

因ありて、また外界の機會にも種々に應化の能力あり。されども外緣のあらざれば自ら獨り作さぬなり。

業力六道を爲す因緣

人の天性感覺の自然の生理を營みて、天性のみの內性は劣神にして、たとひ形は人たるも其業は畜類なり。彼畜類の生物は禽獸昆虫の類より階級無數に分つとも、只天性の心にて自己の本能に規定され種々の作業をなすなり。心愚かに天性の眞性の氣に驅られて、荒狼の暴業や禽〇の猥〇〇ぞや。本能のまゝにして、善惡何れも發達せず、畜類の本能のなかに生れしまゝの劣態は、人は全體高等の理性十分發達し、理性の光には肉によるすべての心理みちびきて、正しき人道進むべき責任あるを無視して、向上業爲の遂ざるは是畜類の業ぞかし。

鬼道に九種の類あり、中に三種を分てば、肉慾我慾が天性の上にもますます發達し、飲食男女の欲などは本自生理の規定なり、自然の現定を逸しては無明の惑に惑はされ、生理の目的なるもの、慾を貪ぼる惑より、屢爲せば習性が抗進遂に性となりいよいよ進まは五欲の奴隷となり遂に五欲が病的と卽ち無財の鬼となりて、五欲に飢えていつも飽くこと知らざりき、多財餓鬼とは我慾にて、財寶積み

て山を成すも尙飽かず、愈々我慾つのりては我欲のために他の人に害を與へ。勢力鬼とは世の中に名譽權利位置などの我慾の爲に世の人に（……）

我慾深くばおのづから、嫉妬の心も深くしてたとひいか程名譽財寶積むとも心と業は餓鬼道の區に入るこそあはれなり、アラヤの業力は一切の物質元素を吸入し、業力不思議の模型にて種々の生を造化す。

無明の微粒生が進み出て、人類とまで、無明の心に伏藏したる本性發展したる結果なり。この發展は卽ち業努なり。微粒の生が本能に先天有せし伏能啓發し、生々世々の努力より進み進みて生命に、自己の力のある限り、外界の緣を賴みては生存競爭の力、本來性に向上の心性あれば緣に助けられては伏藏を啓發しては向上し。

元始の生も內心に活氣充てし衝機、生理衝動は自己の生命、向上せんと盲進突貫して、無明と業、生命を發せらるれば快に、えざれば苦、衝機は無明、衝氣に稱ふを貪りて、違すれば苦と感ず、衝動苦樂は彼の生命向上の因緣とし、本來一が分殖し因緣によりて向上す、原始生より代々間斷なく、各々自己の責任を盡し努力し漸々に努力し子孫には向上發達。原始の生物幾分か進み進みて子に傳へ惠

を後に殘す。然らば我等は自己の責任を盡し向上せん。

識

生は自己の衝動に己を益する方に展し、種々の外緣を藉りて自己を造るを業と云ふ、一個の自治に統べられて自己一切の身心を統一自治を識と云ふ。識心本來は善惡定相なけれども、善惡邪正何れにも隨業變化の能ありて、白紙が青赤種々の色に隨ふごとくして、六道種々に業力が力によりて六道の習慣性を爲す時は、無記異熟、アラヤ識、隨業轉變さだめなし。

心の自性の因種に自性を維持して、世に轉々と等流する。生理の理法にも自己の爲す習慣性を造りては、自己の性を子に讓り遺傳と云ふ。されども自己は外部なる緣を持たずば成らざれば隨緣順應の力より異性に熟する異熟識。

植物果實に熟すれば全部の種子を有する。自己の身體及精神の性相體力悉く、尅識しては傳ふなり、么少微虫より高等なる人類と階級を通じて自己の性相傳ふ、生物原始の劣等より人類に至りしは生存競爭場裏にあらゆる力を竭して鬪爭勝利を得たるもの最も高き人類と向上し、累代敵にうち勝ちし勇猛努力の結果なり。四肢五官身體の全部の力は悉く自我統一の識神に尅識しての結果なり、生物

進化の目的は無明の暗黑の性より明に向ふて進化せり、植物生活が動物動物より人類と理性の明を期待せり。

しかれば人は萬物に勝れて明き識心、如來に受けし識心の深く伏在る性を益々開きてある限り身心共に彌や變じ眞善美妙に向つて發展せらるべし。人はすべての生物に拔いて職責重し、識とは自我にて人格の全部を統一する力なり。進めよ進めよいや進め。我等が腦裡の奥に神の秘めたる如來藏、無限の財源藏せり。世を文明に、腦に藏せる心識の光を發して明くせよ。

人の命の終には三種の愛心發動す。初に境界愛おこり妻子親族より乃至家屋家具など我所有と執し來りしも、永く別れせまるに執心愛着す。五識の燈消え、次に末那の我分別より自身の體を愛念す、全く此身は我なりと執し來りし此體はいよいよ意識を失ひて、アラヤの自然に當生の境界現前す夢境の如くに。當に受くべき道は各自の業識尅果せば、道六に分かる。

或は極重惡人の當に斷末魔に臨みては熱炎燒煮る如くにて忍びがたきに、清冷泉を慕ひしに清涼の池現はれぬ、悅び進みて水に投ずれば水と見えしは忽ちに炎と化して身を燒く。自ら造る惡業の薪を

重くつもりては業火に燒かるゝ傷ましや。或は餓鬼畜人天の、己が業に率かれてはめぐる因果の小車は代るものや有る。

當に終に臨む時六親つどひ悲しみの泣聲だにも聞えず、うつろひて中有の境は現はれぬ、堂屋の間に愛の緣にひかれて識は彼處に○○、之を中有の○○此身を離れし刹那當生に至るなり、三種愛心は臨終刹那の念、因緣等流の緣により父母の許に托すなり。

生理遺傳、

たとへば同胞五人の同じ父母の模型にて五人ともに相似の中に各自の性相異るはいかなる因緣形向上の緣ありてか、されど自然法則は因緣果報の法則を逸して外に有らざらん。されば姙娠當時三月の父母の心意の善惡は其身心に尅識し核に其氣を結び尅しては精子卵子に等流して、胎兒に其れを遺傳す。されば人の父母たる人々は自ら常に肅みて自己の形氣を子に傳ふ。其利害は自己に止まらず、子々孫々に綿々と流るる如く流れ流れて末は、其水源の土質をば、水に含みて幾ばくの、代々の氣質を托しては兒に傳へしか數知らず、近くは父母の元質を直に傳ふ。

世の人々よ精神を高くして、天に在ます大みおやの淸きみのりに向ふべし、智德ともに修養し人格

高く形成せよ。人生業力は結果は自己の識心に結びて終身作すこと悉く己が神に尅する。人格は天に對する職にて進化の階級すゝみ其子に形氣を傳へて向上せしむるは人に報ずるつとめなり、精神共に明らけくまた清らかにもつべし、天に對し人類に對し、別して責任重きなり、

名色（生に形と心）

人に色心二面あり、外面生活の身體と內的生の精神と此の色心の兩面は二にして一、不離の關係、或は一體兩面を色心と名づけしなり、されども身は質碍、心は無碍にして、母胎に宿るとき識は名ありて形なし、質元の身と合ふときを名色とは名づけたり。精子の元質は單細胞の精子に、たとひ偉人とても生物の原始のアメバと毫も異點は發見せじ。されど不思議は此の細胞に伏藏する身心性能悉く伏藏して漸々に無數の時間を經るほどに生物原始の微粒より生物進化の階級は無數の時間に外部の緣に資せられ、無數の世代と階級とを經歷して進み進みて原始の人類開化の人となりし無數の代と時とに進みしものをくり返して、人の兒を胎內十月に進化の階級を經歷し此人の兒となる。

色名とは識神、一切の心理を藏せる、色とは父母の遺體の色、名とは陽、精の神にして、色とは陰精の質なり。陰陽合して人となる。

十二因緣

因緣者是十二法展轉能感果故云因互相由藉而有謂之緣、因先に其事無彼より生。緣素其分有て彼に從て起

無明　過去一切煩惱。是無明。過去未だ智慧光明あらず故一切煩惱起ることを得る故に是故過去煩惱無明なり。

行　過去煩惱に依り諸業を行ふ煩業苦三道の中には業道也。

識　倒心を以て欲境に趣く。是中有。先倒心を起して欲境に趣く。彼業力に由て起す所眼遠方に住すと雖能く所生の父母交會を見て倒心を現す若男中有母を緣して愛を起し欲心を生ず。若女中有父を緣して愛を起して欲想を生し此に緣に（　）俱起（　）心。又托胎初念を識と云。第二念を名色

大（　）先　中陰父母の所に於て貪愛を生じ愛因緣の故四大和合精血に滴合して一滴と成す。大（　）如カララと名く。カララに三（　）あり。一命　二識　三煩

名色　心は名のみあり。赤白二諦。大論曰、身内欲蟲入和合時男蟲白精如涙而出女（蟲）赤如吐血出骨髓膏流此二蟲吐（　）らしく出

於父母生婬愛心中有位此中有身設受生有身最初一刹那名識是非婬愛心受生心識名識

父母赤白二諦和合宿腹眼目等六根未具足只如形大（聚）骨肉支節等（　）の位を名色と云

六入　六處共六根具足未辨苦樂別（　）中三十八七日胎中位　六根成就して胎内より出づ

觸　初生より二三才に至る。其間感覺あれども未だ分明ならず。眼等五官未だ發達せず、只觸覺のみあり。故に寒熱等に觸れば即ち泣。

○

無明　過去生死輪廻無明を本因とす。生死の眞源を明覺せず。故に自ら生の從來死の趣向する處を識らず。明覺の神に明覺の光なきが故に生死に輪廻す。

不覺の神力善惡の行業の因によりて三善三惡六道の身を受くるの原因となる。

識　神心にもと人畜等の差別あるにあらず唯其の六道の行に由て種々異熟す之を業識と云ふ。

名色　過去の業識母の胎に投ずるを名と名づけ、父母の精蟲と卵子和合を色と曰ふ、身と心との本

なり。

微粒より胎兒漸く發育して、二百八十日全成熟して四支五官等悉圓備することを云ふ。

觸　已に胎兒成熟して初めて分娩するとき五官ありと雖、眼に見耳に聞く等感覺發達せざる初、觸覺のみ感ずる故に觸位とす。

受　小兒の精神は白紙の如く人は過去より將ち來りし資性によるものの後天的の四圍の境遇に緣せられて善惡六道種々に造り出す。

愛　身體成熟して生殖欲の將さに發せんとする時。之を戒る色にありと云ふ時。夫婦の因緣は相共に其性質を薫染しゆくが故に結婚の後は大に其性質を變ぜしむ。是より成熟して其作す處善惡何れに進むも未來の因となる。

取　愛欲の已に深く熟したるを取と云ふ。已に一家を成して一家圓滿の中に夫婦相親む之は親子相和に恩愛結縛し一家骨肉の（　）の取（　）人の心意に

有　人の愛取より生涯作爲したる善惡の業は其神識に結ぶ。人の幸不幸の果報となるべき自の因（　）悉くあらや識に所有す。

生　あらや識に善惡業の結合し苦樂の果を受くべき勢力已に有する故に其業因に隨て生を受く。

其生るゝ時は其原因に報いて苦樂の身長短の分

故に老病憂悲憂怖苦惱其業因に（　）

其果は死にあり。死すれば亦後の身を受く。是無明による。

○

無明　一切生物は根本を一にす。原始生物より進化す人類は生物の進化したる、自ら生の眞源を悟らず妄動の（　）妄動氣あり。

行　境遇の緣に隨つて生物の行業は益々發達し善惡何れにか發達す。原始其行は生存競爭、行は益々自性を發達せしむ。能く行ものは勝（　）ものは劣。

識行の競爭の勝劣は外部よりは內的生活の精神其（徵）す

親の身心の發達と否とは其子に遺傳す

其父母の發達せる身心は其子女に遺傳す。其胎兒の身心に遺傳す。

六入　父母よりの遺傳を因とし胎中の母の境遇と事情（　）其胎兒を善惡に養ふべき緣となる。是胎教の必要なる所以。

觸　人は（　）

受　人の父母の遺傳　資性　本白紙の如し

先天の父母遺傳の資性と後天の家庭學校社會の教育及び四圍の境遇は其人を善惡六道種々に鎔化す。

人未だ成年期に至るまでは父母の（　）養未だ自己の自由にあらず

愛　人　生物は雌雄（　）爲に生物は兩性の交合によりて種族を保存す、是生欲（　）する所以なり。

夫婦相互の生

兩性遺傳の理、結婚は相選ざるべからず、

取　雄々しき雄が眉根には大威力の面影動き優しき雌が瞳には大慈悲の片影を貯へ（　）

○

受　胎兒時代胎兒の心情の發達順序、胎兒時代は我々所識に、一年の兒、母が他兒に乳をやれば嫉

て怒る。好で動物を虐る非社會的情が早く發す。之を支配して社會的に馴すは習慣。理窟はない。

（　）化して同情となる。

五六歳前は習慣　若し兒を呼て返答するは習慣なり。若し習慣に違ふと直ぐ治。此時代は唯善良なる習慣をつくべし。制裁と叱とは無駄、善い習慣を以つて悪い習慣を排すべし。

幼稚園の終り頃、自分の外に他人ありと思ふ。一緒遊べば、同時に模擬心發し人の辭儀を見て己も譽らるれば喜ぶ。

道德意識は他律的制裁と賞罰を恐れ、交友の撰が必要、模擬心が行爲を支配する故に忠孝悉く模擬的機械的に敎ふ。

十二因緣（講演目次謄寫版）

序說

一、人生の緣起を、心識の三世因緣と、體系遺傳の兩面より說明す。

二、人生の緣起を覺明するを宗とす。

三、心靈及び身體、遂性完成を期し、自覺的、家庭代々に向上す○○○

四、十二因緣の圖式。

五、人生の主體生命の諸說。

（1）生命唯物論に物體生命と特殊精氣。

（2）生命唯心論。

（3）物心併行論。

（今）併行論。心識輪廻と生物遺傳併行。

六、人生緣起の諸說。

1、超然神の所造。2、一大元氣自然道法。3、業力所感。4、阿賴耶識。如來藏性。重々無盡法界緣起。

七、開覺すれば聖者となり、無明に緣れば六道に輪廻す。

本　說（心識六道輪廻次第と生物遺傳）

一、無明。生死の源。生物原始。

（甲）1、惑業苦の關聯。

2、起信の業轉現。

3、唯識阿賴耶識。

4、俱舍の業。

今曰く、全一如來藏。二展世界性。三展衆生性。

原始極小は極大の縮小。

（乙）生物原始。電子精氣單細胞生物。極小微粒。同化成長力ある原形質。生物の發生。人類最下

生の(卵)。同一の無膜細胞。若心性、若體系、何に緣つて種々に分岐するか。

曰く因緣と業行に由る。

二、行。衆生本定性無し、行業に緣つて善惡六道と分る。

1、不覺盲動、三惡道。2、理性自覺、三善道。3、行爲の習慣第二天性。4、下等動物努力結果人類と進化。5、嚮動、衝動、意志動三あり。

1、生物全體若くは部分使用に隨て發達。2、不用部分は退化す。3、人の腦髓心性の各部、仁慈靈妙、乃至、破壞等六道に配すべし。4、腦髓の部使用する性發達(各自の短所を認めて矯正高等の性發揮を要す)。5、引業(形式)滿業(實質)。

三、識。

1、入胎の刹那の阿賴耶識。過去一切の事物種子を含藏し、外緣を待つて現起す。2、臨終三種愛(境界愛、自體愛、當生愛)。3、中有身半身計。4、無明同一性、變化六道の我となる同一原始生物四十萬動物十二萬植物と化する如し。5、生物遺傳の說。

四、名色。無形の識と父母の形質と合したる位。

（甲）1、貧富貴賤因緣相應して入胎。父母品性高卑胎兒の質に及ぼす。

（乙）1、精子卵子との合體。2、生命核と外包。3、單細胞と複細胞生物。4、複雜なる遺傳質

五、六入。胎內十月胎兒の五位。（和合、頗、血肉、肉團、支節形）。1、形過去の因質と胎中の緣。

2、姙婦素行と胎兒。3、土偶の土と模型。4、胎教の效能。5、胎內七ケ月と生後七年。6、姙

婦感情銳敏。7、環境より胎兒に及ぼす例。

六、觸。孩と嬰と小兒の期、生れて六歲に至る萠芽の期。

1、小兒大人と身體不釣。2、身心發育上の注意。3、搖籃教育の出發。4、慈母の懷が長生。

5、心身の觸の適度。6、嚴父溫母との調和。7、溺愛の不可。8、家庭神聖。9、美德の萠芽、

推理の注意。10、遊戲と玩具。11、氣質の淘汰。12、生物進化の繰返。

七、受。小兒より童子靑年に至るまで長養の期。

1、天性具はる肉と薰陶の緣。2、禽獸と異る點。3、〇〇の注入と開發。4、受は天資を完全な

らしむ。5、適當の目的と方法。6、本能習慣特性と教育。家庭學校四圍の緣。7、身心發達の時

期。8、身心の薰陶。9、　教化（智）。感化（情）。訓化（意志）。10、家庭は內に、學校と社會は

公共德。

八、愛。青年過度の時代、春期開花期

1、外部と共に內部の變化。2、男女特性の發達。有機形成に全力を注ぐ人生の危機。虛榮は此期を利用して自覺的發達すべく內機の愛情と共に外界の虛飾。3、向上。春期花開との旺盛。活動。破壞。進步。向上。花に嵐の喩。人生の花結婚。

(イ)配偶の適當。(ロ)已婚の性格變。(ハ)兩性遺傳質。

九、取。壯年より成熟期。執意個性より形成し人生果熟。取執意個性を形成す。

1、方針確定幸不幸分岐。2、父母放任と干涉弊。3、職業繼承の否。4、適當の職業。5、人格形成。6、家庭の六道。7、行爲の責任。8、人執心する方面に人核を形成す。9、人格核に善惡各三業

十、有。各自畢生の人格形成の種子核の成熟。

例へば植物種子、產生起の作用ある如し。知識財產位置等悉く捐てて、一生の業より結ぶ六道の種子識のみ有て未來に赴く。

十一、生。現在の種子より未來の生を萠芽す。

1、種子の種々。2、生物細胞組織の交代、生者必滅。3、精神發達順序。嬰兒感覺と直覺、一より七。知覺感覺の觀念八歳まで。根念推理十五まで。活動的推理十八まで。有ゆる心力を以て理想を作る二十四歳。人生の光明。孩、嬰、幼、青。壯、成熟、老。

十二、老死。

1、處世觀。2、厭世と樂天。3、何等人生の幸福。4、人生の目的。5、生物界人間の位置生活の三位。6、頭腦の三階。天性、理性、靈性。7、靈性開發自覺光永生を得。理性善用は三善道、天性惡なるは三惡道、此の善惡の業道は六道輪廻して出期なし。

結論

心靈は生理的生命を向上せしむ。生理的生命の向上は心靈的生活の手段と爲る。

願くは心靈と偕に生理的の向上を目的とし、近く家庭に及ぼし、社會改善に身心を献げんことを請ふ。

炎王光

- 惑
  - 見思
    - 見惑
      - 五利—身、邊、邪、取、戒
      - 五鈍—貪、瞋、痴、慢
    - 思惑—貪、瞋、痴、慢
  - 塵沙、（所知障）
  - 無明
- 業
  - 善—三—天、人、修羅
  - 惡—三—地獄、餓鬼、畜生
  - 不動—天—無色界
- 苦
  - 生
  - 死
- 三障
  - 業障
  - 罪障
  - 煩惱障

個人罪―氣質、性癖、習慣、病的惡弊症、遺傳

共同罪―團體的（徒黨）罪惡、流行性罪惡、遺傳性罪惡等

宗教的人類三聚
- 邪定聚（背神的）
- 不定聚（劣神的）
- 正定聚（協神的）

流轉說の目的と方便

佛教は流轉還滅の二門を以て示すに、流轉の甚過りなることを切に教へ知らしめ、之を棄厭せしめて還滅によりて本元に還歸することを悟らしむ。本元に歸せざれば微塵劫を經とも生死を脫することの能はず。

此流轉の過りなることを說て之を厭はしむるは方便にて專心に還滅に向はしめるは目的なり。今淨教の如くは厭欣の二心を以て惣安心とし、六道生死たる三界は虛假の處無窮等不實の中に於て自ら惑

ふて實有とす。是の如くの生死は畢竟にして虛妄なり凡夫認めて實と謂へり。是惑の甚しきなり、知者之を棄厭せよ。彼の不虛の處不無窮の處なる淨土に生じて、この夢さめて如實の實境に入れよと。

本來吾人が實在と謂ふものは皆是幻化の境にして、畢竟空なるものなり。此の中に於て惑が故に實有と謂へり。爲に實際善惡なき中に於て迷の中に善惡の業を起し此迷の中の善惡の妄業によりて虛妄なる苦樂の幻境に無實の苦樂を實に苦なり實に樂なりと計す。

是の六道生死は自己の惑より感ず。慧眼の中に六道流轉あることなけれども衆生自ら妄に夢の中に浮沈すれば爲に之が厭ふべきことを敎へしは、完く止を得ざるの事實なり。佛敎は此の輪廻說を以て目的とするにあらずして不輪廻の實境に入らしむのまでの方便なり。

此の六道輪廻は衆生の關係上理數の免れざる處なり。佛は先づしばらく置て吾人が實踐理性の請求の因果律を以て是を假定するにあらざるよりは、如何がして、この衆生が生涯に受取以て有する處の業力の歸する處を得ん。依つて今しばらく六道輪廻の說の起緣せる所を論じて、公平なる因果律の歸する處を說明せんと欲するなり。

衆生知情意の三及三業善惡によりて善惡共に上中下三品あり六道を作る。

然れども此の輪廻說を以て、決してこの中に於て、惡を棄て善をすゝめ人天の果報を受しむ如きは、佛の本意にあらざるなり。六道輪廻は迷の中の因果律免るゝを得ざるより說示したるものの、これを出離して不輪廻の處に歸せしむるが目的なり。

目的何にあることを計らずして、棄てしむる處の方便の方に於て、科學及實驗上輪廻の證なしと諜々として言論を費やすは、其目的なる吾人が精神を絕對なる智福の妙境にかなはしむるの妙法に於ては未だ曾て夢だも見その想像さへもいだくこと能はざるべし。世に云ふ實驗と謂ふは其實何の邊にか有る。